

『子供之友』に描かれた子ども服について

高橋 知子
愛知学泉大学

Children's Clothes Portrayed in the *Kodomo-no-tomo*

Tomoko Takahashi

キーワード：子ども服 Children's Clothes、洋装 Western Clothes、絵雑誌 Picture Magazines

1. はじめに

『子供之友』は生活教育雑誌として、羽仁もと子、吉一夫妻により、1914(大正3)年4月に創刊され、1943(昭和18)年の休刊まで30年間発行された。『子供之友』では北澤楽天、竹久夢二、武井武雄、村山知義などによる質の高い童画が掲載されている。この童画を中心とした企画展「描かれた大正モダンキッズ 婦人之友社『子供之友』原画展」(2016年から2017年に全国4館を巡回)が開催されることになり、刈谷市美術館より、愛知学泉大学に対して原画に描かれた子ども服と付属品の再現製作の依頼があった。再現したのは、武井武雄画「さくら」(1924・大正13年4月号)の少女、村山知義の表紙絵(1924年8月号)の少女、竹久夢二「きまぐれ竹の子」(1927・昭和2年5月号)の少女である。

原画の再現製作に関しては、これまでに、「内藤ルネ展—“ロマンティック”よ、永遠に」(2007年から2010年に刈谷市美術館ほか全国巡回展)、「藤井千秋展」(2014年・刈谷市美術館、2015年・安曇野市豊科近代美術館)において、本学に依頼があり、学生が製作した作品が展示された。作品製作では、展示できるレベルの作品を目指して裁断・縫製を行うことにより、学生の技術力の向上と主体性・実行力の育成が期待でき、教育的効果が高いことが明らかである。これらの点については、すでに報告^{注1}している。

『子供之友』が創刊された大正時代は、子ども服

にワンピースやツーピース形式のシンプルな洋服が登場し、洋装化が進行した時期である。また、大正時代は子ども向けのモダニズム文化が登場してきた時期でもあり、絵雑誌が多く創刊されている。そこで本論文では、『子供之友』に掲載された童画に描かれた子ども服に着目した。再現した挿絵を中心に、『子供之友』掲載の童画に子どもの洋服がどのように登場しているかを調査し、そのデザインと当時の流行の関係について考察した。

2. 『子供之友』について

『子供之友』は、良質な子どもの雑誌を求める母親の声に答えて、羽仁もと子、吉一夫妻により創刊された絵雑誌である。日常生活の常識、道徳観念の習得をめざす羽仁もと子の教育理念に基づいて、「甲子太郎」の記事では良い子と悪い子の生活態度の違いを絵と文で示して、生活教育を行った。また、創刊当初から著者名・画家名が表記され、多彩な才能を持った画家が挿絵を描き、上質な絵雑誌となった。1943(昭和18)年、第二次世界大戦による用紙逼迫で休刊となった。

3. 『子供之友』の挿絵に描かれた衣服

『子供之友』の挿絵に描かれた衣服について検討するために、文献^{注2}をもとに、1930年までの挿絵に描かれた子どもの衣服の種類を表1にまとめた。

表1 『子供之友』挿絵に描かれた衣服の種類

年・号	タイトル	画家	和服+ エプロン	洋服+ エプロン	和服	洋服	帽子	その他
1914年4月号	本のとりっこ	北澤楽天	○		○			リボン
	ボンコのちえなし	北澤楽天				学生服	○	
	遠足の朝	北澤楽天			○	学生服	○	
1914年5月号	ボンコはおあずけ	北澤楽天				学生服	○	
1914年11月号	橙のうた	竹久夢二	○					
1915年1月号	表紙絵	北澤楽天				セーラー服		
1915年2月号	泣く子	竹久夢二	○		○		○	
1915年3月号	ひなまつり	北澤楽天	○		○			リボン
	つみくさ	竹久夢二	○				○	
1915年4月号	花ひらく	竹久夢二	○		○	○	○	
1915年5月号	花の園	竹久夢二	○			○	○	
1915年6月号	水族館	竹久夢二	○				○	
1915年8月号	表紙絵	北澤楽天	○					
1915年10月号	ウサ吉と太郎とボンコと次郎	北澤楽天			○	学生服	○	
	お月さま	竹久夢二				セーラー服		
1916年2月号	雪合戦	竹久夢二				○		
1916年3月号	おひなさま	竹久夢二	○			○	○	リボン
1916年4月号	まわれ はしれ	竹久夢二				○	○	リボン
1916年5月号	海をみる子ども	竹久夢二	○	○			○	リボン
1916年7月号	金の馬と兎馬	竹久夢二			○	○	○	リボン
1917年1月号	かるた会	栗原玉葉			○			リボン
1917年5月号	自転車に乗った小僧さん	北澤楽天			○	学生服・ セーラー服	○	リボン
1917年10月号	表紙絵	君嶋柳三	○				○	
1917年12月号	落葉たき	岡落葉			○	○		
1918年4月号	表紙絵	栗原玉葉	○		○			リボン
	春の音楽会	亀高文子	○	○	○	○		リボン
	お花見	君嶋柳三	○	○	○	○	○	リボン
1918年5月号	つつじの名所	嶺田弘	○	○	○	○	○	リボン
1919年9月号	秋の虫とり	嶺田弘	○		○		○	リボン
1921年2月号	ふゆの子どもたち	田中良				○	○	ゲートル
1922年9月号	表紙絵	亀高文子(推定)		○		○		リボン
1923年9月号	表紙絵	本田庄太郎(推定)	○			○	○	リボン
1924年3月号	青い鳥	亀高文子		○		○	○	リボン
	ぼくとさぎ	村山知義				○		
	東京のまちの馬	村山知義				○		
1924年4月号	さくら	武井武雄				○	○	
	ぶらんこぶらりん	村山知義				○		
1924年7月号	とりのおかみさん	村山知義				○	○	
1924年8月号	表紙絵	村山知義				○	○	
1924年9月号	もしもあめのかわりに	武井武雄				○		
	あめやさん	村山知義				○	○	
1925年3月号	公園の池	村山知義				○	○	
1925年4月号	表紙絵	亀高文子	○			○		リボン
1925年7月号	ふくろ	竹久夢二				○	○	
1925年12月号	あとからあとから	武井武雄				○	○	
1926年1月号	せい順	村山知義				○	○	
1926年3月号	ももばたけ	竹久夢二				○		ゲートル
1926年5月号	兵隊さん	村山知義				○		
1926年6月号	あさ風すず風	武井武雄				○		
1926年7月号	七夕様	岡落葉			○	○		
1926年8月号	ボタンと子ども	竹久夢二				○	○	
1926年10月号	まきばの話	竹久夢二				○	○	ゲートル
1927年4月号	春風とつぼみ	武井武雄				○		リボン
1927年5月号	きまぐれ竹の子	竹久夢二				○	○	ゲートル
1927年8月号	迷子のジャガイモ	村山知義				○	○	
1928年7月号	鏡の中でであったこども	武井武雄				○	○	
1929年4月号	遠足	岡本婦一		○		○	○	
	春	竹久夢二				○	○	ゲートル
1929年5月号	電信柱	竹久夢二				○	○	ゲートル
	かえり道	村山知義		○		○	○	
1929年12月号	昨日と今日と明日	竹久夢二				○	○	
1930年3月号	みのむし	川上四郎	○			○	○	
1930年5月号	母の日	竹久夢二				○		
1930年9月号	十五夜	竹久夢二				○	○	

衣服の傾向を、表1によってみてみると、創刊当初から1910年代までは和服を着た子どもが多く登場している。洋服では、男児は学生服またはセーラー服に学生帽、女児はセーラー服が見られる。この時期は洋装が広まり始めた時期で、まず、通学用の制服として着用する例が多かったのではないかと予想される。1920年以降の挿絵では洋服の子どもが増え、和服はほとんど見られなくなっている。洋服のデザインも学生服だけではなく、女児はワンピースやツーピース、男子は上着とズボンを着用している。特に女児用の洋服はデザインや色・柄ともにバリエーションが豊かになった。このころになると洋装が普及し、読者の関心も高くなったのではないかとと思われる。

また、和装・洋装に限らず、幼児が着用しているのがエプロンである。1914年4月号「本のとりっこ」(北澤楽天)には、装飾のないシンプルなエプロンをつけた幼児が描かれている。竹久夢二も1914年から1916年ごろの挿絵で、シンプルなエプロンをつけた子どもを多く描いている。1915年6月号の「水族館」(図1)では、エプロンの背面が描かれているが、上部をボタンで留め、下部は開いている。『子供之友』に描かれたのは、このような後ろ明きのシンプルなエプロンがほとんどであり、君嶋柳三、栗原玉葉、亀高文子が同様のエプロンを描いている。例外として、1915年3月号「ひなまつり」(北澤楽天)では、袖ぐりにフリルをつけたかわいらしい形が登場している。エプロンが取りあげられた時期は、1914年から1915年が多いが、1920年代以降でも、幼児を描く時の定番としてたびたび登場している。変化しているのは着方で、1910年代は和服の上にエプロンをつけているが、1916年、1918年からは洋服の上にエプロンをつける場合が見られる。



図1 竹久夢二「水族館」
『子供之友』1915年6月号(婦人之友社所蔵)

1918年ごろからは描かれた子どもが全員、洋装であることが多くなった。洋装の付属品では、ゲートルの着用が1920年代後半で多く見られる。ゲートルは現在の子ども服では見かけないデザインだが、この時期の流行ではないかと思われる。『子供之友』では1921年2月号「ふゆの子どもたち」(田中良)でゲートルを着けている。一面に雪が積もった坂道でそり遊びをし、氷の上でスケートをする子どもたちが描かれている。男女ともに洋装で、フード付きのオーバー、マフラー、セーターなどを着用しており、足元は毛糸の靴下かゲートルをつけている。1926年から1929年にかけては、竹久夢二がたびたびゲートルを描いている。1927年5月号「きまぐれ竹の子」(図2)では、竹の子の成長に驚く子どもたちが登場するが、コートや帽子をかぶって、脚にはゲートルをつけている。他の挿絵でも場面は春が多い。ゲートルはおそらく防寒のためとともに、流行のアイテムだったのであろう。

以上のように、『子供之友』の挿絵では、1920年以降、洋装の挿絵が多くなり、デザインも豊富になったこと、エプロンは和装・洋装ともに着用されたこと、ゲートルは流行のアイテムであったことが分かった。次章では、それぞれの内容について述べる。



図2 竹久夢二「きまぐれ竹の子」
『子供之友』1927年5月号(婦人之友社所蔵)

4. 明治期から昭和初期のエプロン

(1) 裁縫書の西洋前掛とエプロン

エプロンは、日本では明治時代から着用されていた。当時の着用状況について1901(明治34)年の『東京風俗志』では、「今や伽羅子製の西洋胸掛大に行はる」¹⁾と述べられていることから、1901年ごろには東京でキャラコ製の西洋胸掛つまりエプロンが

流行していたことがわかる。エプロンは当時、「洋式前掛」または「西洋前掛」とも呼ばれ、1905（明治38）年以降の裁縫書や雑誌に登場している。例えば、1905年刊行の『婦人と子ども』では、村田かめ子著「新形西洋前掛：小児二三才」が紹介されている。これは、えりぐりにギャザーを入れ、袖ぐりにフリルの装飾を付けたもので、「わづか二尺四寸巾の布一尺八寸で出来上り、かくこうも、余り悪くありません又仕立て方も、容易でありますから」²⁾と説明されており、裁断図も掲載され、簡単な構成でできるように工夫されている。

1907（明治40）年の山田東明『洋式小物雑種裁縫新書』では、「洋式前掛」³⁾として9種のデザインを紹介している（表2）。「女児用肩結」は和服にも使える和洋兼用の便利で重宝なもの、「女児背釦止前掛」のように、後ろ身頃は背中部分のみで、着物の帯が邪魔にならない工夫をしたものなどがある。ほとんどのデザインにギャザーが入っている。洋式や和洋兼用と、用途に合わせているが、着装図は和服の上に着る形で描かれている。

シンガーミシン裁縫女学校長の秦利舞子著『みしん裁縫ひとりまなび』（1909年）には、「蝶形小児前掛」「剣形小児前掛」⁴⁾（図3）「胸飾り附小児前掛」「レース透し入女児前掛」などの裁ち方・縫い方とデザインが載っている。ミシン使用法を詳しく解説した上で、シャツやズボン、単服とともに、前掛を紹介している。「蝶形小児前掛」は肩に細かくタックを取った布を飾り、「剣形小児前掛」は肩紐にギャザーを入れた布をつけている。ギャザーやレースなどの装飾が多く、可愛らしいデザインである。

「エプロン」という表記で紹介しているのは、松江みさ子著『子供西洋服の拵へかた』（1908年）、岩村秀太郎著『小児服のいろいろ』（1908年）である。特に『小児服のいろいろ』では、「凡てエプロンは幼児の夏服の袖なくして腰に飾りなきものゝ形と知るべし」⁵⁾と説明している。「少女には下のコートは單純なるものを用ひエプロンに意匠を加へて外形を飾るを普通とす」⁶⁾とし、エプロンの装飾が少女らしさを表すものであるとしている。

大正時代には次第にシンプルな前掛やエプロンが紹介されるようになった。図4は1925（大正14）年の『新裁縫教科書：中等教育』に掲載された小児用男女共通の前掛⁷⁾で、3,4歳用である。装飾は前身頃のアップリケのみのシンプルな形となっている。

表2 『洋式小物雑種裁縫新書』の洋式前掛

名称	対象者	特徴
女児用肩結	女児	和服に使える和洋兼用の便利で重宝なもの。肩紐で前後を結ぶ。丈は着物と同じくらい。
女児背釦止前掛	女児	後ろ身頃は背中部分のみで、ボタン。丈は着物と同じくらい。
男女児背釦前掛	男女児	後ろ身頃は背中部分のみで、ボタン。丈は膝くらいまで。
女児帯付前掛	女児	身頃とスカートにベルト布をつなぐ。身頃と肩、裾にギャザーを入れる。
和洋兼用前掛	男女児	衿ぐりの回りで布を折り返して、ギャザーを入れる。
和服用前掛	女児	後ろ中心付近で紐結びする。割烹着形式で袖なし。袖ぐりと裾にギャザー。
背面紐くり止め前掛	男女児	衿付けでくり止めにして、後ろで結ぶ。
タスキ前掛	男女児	エプロンに胸当てのついた形。紐で結ぶ。
紐結び前掛	男女児	普通の前掛で、背中上部で結ぶ。

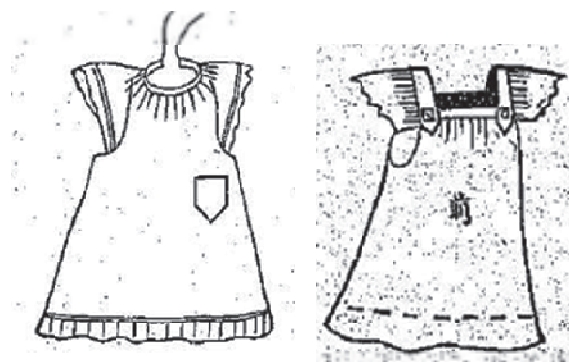


図3 「蝶形小児前掛」(左)「剣形小児前掛」(右) 『みしん裁縫ひとりまなび』(国立国会図書館所蔵)



図4 小児前掛『新裁縫教科書 中等教育』(国立国会図書館所蔵)

(2) イギリスのエプロン

1905年ごろに裁縫書で紹介された子ども用エプロンは、西欧で流行していたものをそのまま取り入れたものである。イギリスのヴィクトリア&アルバート美術館所蔵の衣服資料には、子ども用エプロン（ピナフォー：pinafore、1918年イギリス製）が所

蔵されている(図5)。これはエプロンの身頃、袖のフリル、裾の飾りにレースを用いた豪華なものである。ピナフォーは衣服の上に重ねて着る汚れ防止用の上着の一種で、えりや袖がなく、後ろ明きで、紐やボタンでとめる。ピナフォーの中には写真のようなレースを使った装飾的なものもあり、このような衣服の製作方法が紹介されたと考えられる。

エリザベス・ユウイングは著書の中で、「19世紀末から20世紀の初頭までの女の子用のフリルのついた、豪華なふち取りをした白いドレスやピナフォーは、どこまでも進化し続けるミシンにはおあつらえむきだったので、一流の店のカタログの中心になった」⁸⁾と述べている。子どもには子ども固有の衣服が必要であるという認識ができたのは18世紀半ばのことで、それまでは大人の服を小型化したものであった。特に女兒は19世紀半ばまで、母親の豪華なファッションを模倣していた。1881年になると、イギリスでは合理服協会が設立され、服装改革が叫ばれた。また、美学運動の影響により、ウエストを締め付けない、しなやかに身体に沿ったシルエットが好まれるようになっていった。この時期のピナフォーは母親のファッションを真似たものではなく、子どもらしい服装としても好まれたのである。

また、1900年にイラストレーターのJohn Hassallがリバティ社の依頼で描いたイラストでは、シンプルなエプロンを着て遊ぶ子どもが登場している(図6)。エプロンを着けた女の子がおもちゃの台車を押している。余分な装飾を省いたエプロンは動きやすく、着やすいデザインである。日常生活では実用性を重視したデザインが普及していたことがわかる。



図5 子ども用エプロン(1918年イギリス製)
©Victoria and Albert Museum, London



図6 John Hassallのイラスト(1900年)
©Victoria and Albert Museum, London

(3) エプロンの普及と挿絵

裁縫書や雑誌で縫い方が解説されていたエプロンは、日本でも大正時代に幼稚園や家庭で着用されるようになった。『読者所蔵「古い写真」館』には、着物にエプロンをつけた姉弟の記念写真(1923年)が掲載され、『安城学園百年誌』掲載の幼稚園卒園記念写真(1930年ごろ)でもエプロンを着けている子どもがほとんどである^{註3)}。このようにエプロンは大正末期には日本各地に普及した。また、エプロンはイギリスでは女兒がつけるものであったが、日本では男女を問わず、幼児が身につけているのも特徴の一つである。

5. 竹久夢二の挿絵にみるゲートル

(1) 裁縫書に載ったゲートル

今回の展示で再現製作をした「きまぐれ竹の子」(竹久夢二画)では、子どもたちは脚にゲートルをつけている。すでに述べたようにゲートルは『子供之友』で1920年代後半によく描かれた。ゲートルとは『新・田中千代服飾事典』によれば、「日本の脚絆に似た足をおおう服装品で、丈は足首から膝下までをおおう程度のもので普通で、これ以下のものもある」⁹⁾という。「足につける場合はズボンの上または直接に足に巻いて、脇でバックル、ボタン、ファスナー、紐などでとめる」¹⁰⁾方法で装着するものであり、軍隊や登山、作業用として使用されるという。『新・田中千代服飾事典』には子ども用としての記述はないが、童画に描かれている子ども用ゲートルがどのような形のものであるかについて、裁縫書を中心に調査した。

西村伊作著『装飾の遠慮』(1922)では、「冬の子

供服」の項で、「冬になると子供の洋服は寒さうだ。そんな服装をして居ると風を引くと心配する人が多い」¹¹⁾として、寒い時期の着装について解説している。肌着を綿裏毛のメリヤスシャツにすることや外套やセーターを着せることの他に、脚を覆うためにゲートルを着けることを提案している。(図7)ゲートルを着けた子どもたちが描かれ、「ズボンの下のメリヤスで其上の靴下の少し厚い、そして膝の上の方まである本當の西洋式の長いものはかせれば決して普通の冬には寒くないのですが。脚絆はつまりゲートルです。毛織の丈夫な切れで可愛い、脚を包むゲートル、兵隊さんや中學生のよりははずつと愛らしいもの」¹²⁾と述べている。さらに、「まだ一般に賣つて居ませんが西洋人のための店、西洋人をお客にする女洋服店だつたら出來ます。メリヤス製のゲートルもあります。」¹³⁾と説明している。また、「ゲートル」の形は見慣れないものであるので、従来から使われる脚絆を挙げて、同様のものであると述べている。

津田敏子著『母の手芸』(1923)では編み物での作り方を紹介している。「冬になって小学校や幼稚園へ通ふ小さい女の子の脚が、洋服の下から長く出てゐるのを見ると可哀さうに感じます。木綿や瓦斯の薄い靴下で、朝の寒い町を歩くのは少し無理でせうから、靴下の上から暖いゲートルを穿かせた方がよい」¹⁴⁾と述べている。革製や羅紗製は男児用で、女兒には毛糸で編んだものがよいとして、白の中細毛糸を使って編んでいる。

樋口歌代子著『編み物の新形と編み方』(大正12)でも、「子供用ゲートル」を紹介している。ここでも冬に洋服から素足を出すのは寒そうであるとして、「歐米ではさうした缺点を補ふために毛糸編みのゲートルが流行して居りますが今年はその我が國にも輸入されまして、大分用ひられてゐますが」¹⁵⁾と述べている。編み物のゲートルは軽くて暖かく、子ども用の防寒具としては理想的なもので、棒針編みの編み方を解説している。

『婦女界』45巻1号(1932)では「三四才用のゲートルセット」が掲載されている。「近頃お子様方の防寒着として、ゲートルセットが流行って参りました。編み物だと布よりもなほ温かさうで、盛んに喜ばれてゐます。」¹⁶⁾として、上着・帽子とのセットで、下半身全体を覆うゲートルを紹介している。同じく『婦女界』45巻2号(1932年)では、「男女

児兼用のゲートル二種」¹⁷⁾で、厚地メリヤスや羅紗を使ったゲートルの縫製を紹介している。このゲートルは大腿部から下を覆うもので、脚の形状に合わせるため、型紙の製図は細かく寸法を入れた囲み製図となっている。(図8)



図7 ゲートルを着けた幼児(『装飾の遠慮』¹³⁾)
(国立国会図書館所蔵)

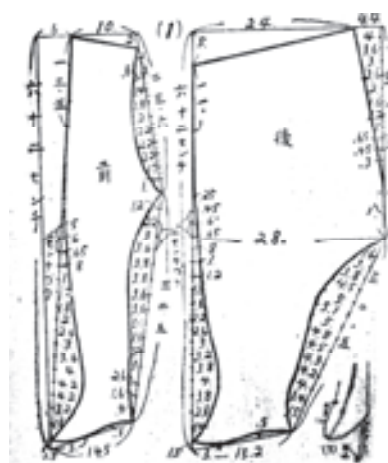


図8 男女児兼用のゲートル二種¹⁷⁾
『婦女界』45巻2号(国立国会図書館所蔵)

(2) イギリスのゲートル

1922年から1930年代にかけて子ども用のゲートルが欧米から紹介され、流行していた。ヴィクトリア&アルバート美術館所蔵の1920年代の絵葉書に「The Rain is Raining Everywhere」がある。1922年ごろにロンドンで作られた、Doris Harland Osborneのイラストによる7枚の子どもを描いた絵葉書の1枚である。雨の海岸を歩く女兒がコートに

マフラー、帽子をかぶり、ゲートルを着けており、防寒用の装いの例である。(図 10)

羅紗などを用いて脚の形状に合わせて裁断・縫製し、脇をボタンで留めるゲートルは、その後、子ども用としては用いられていないようであり、1920年代ごろのみの流行であった。



図 9 The Rain is Raining Everywhere
©Victoria and Albert Museum, London

1920年代には日常生活で気楽に着用できるような簡単なデザインが増加している。例えば、『みしん裁縫ひとりまなび』(1909年・明治42)に掲載された「小児簡単服」や「女兒簡単服」¹⁸⁾では、「胸飾り」としてヨークとフリルをつけ、身頃や袖にはギャザーを入れている。主婦之友社編輯局編『冬の女兒洋服の作り方』(1927年・昭和2)では、身頃と袖を続けて裁断するデザインの簡単なワンピース¹⁹⁾を紹介している(図12)。欧米の子ども服は第一次世界大戦後、衣服の丈が短くなり、余分な装飾がなくなっていく。ユウイングは「衣服のデザインはシンプルで、基本的なものとなり、フリルやレースは主に洗礼式のローブや特別な場合の衣装に限られた」²⁰⁾と述べている。村山の挿絵はその流れに沿ったもので、裁縫書よりも、さらに洗練されたデザインを描いているのである。

6. 村山知義の表紙絵にみる夏の遊び着

村山知義は1924(大正13)年8月号の表紙絵で、ヨットのおもちゃを引いた水辺の少女を描いた。ネイビーブルーの幾何学模様がポイントのワンピースに、帽子、赤い靴を合わせ、カラフルで都会的な雰囲気である。今回、衣服再現を行ったこの挿絵の構図やワンピースのデザインについて検討した。

ヴィクトリア&アルバート美術館所蔵の子ども写真に、村山の表紙絵と似た状況のものがある。図11はビーチで遊んでいる子どもの写真で、イギリスの写真家 Remington, Arthur Herbert が1920年から1939年までに撮影した。イングランドの南海岸で撮影した写真やポストカードは、海辺への家族旅行のお土産として人気があったといい、この写真もカードに貼り付けてある。Remington の写真には小道具としてバケツやスコップ、ヨットがたびたび登場している。村山は1922年にベルリンに留学している。写真のような絵葉書を見る機会があったかどうかはわからないが、海辺の過ごし方についての情報には触れていたかもしれない。

村山の描く少女のワンピースはフリルやギャザーなどの装飾を使わず、シンプルで洗練されたデザインである。日本の裁縫書に紹介されたワンピースのデザインでは、1900年代のものはギャザーやプリーツを入れた重量感のあるデザインであるのに対して、



図 10 1924年8月号の表紙絵原画(村山知義)
(婦人友社所蔵)



図 11 Remington, Arthur Herbert 撮影の写真
©Victoria and Albert Museum, London



図 12 子ども服の変化

(左) 『みしん裁縫ひとりまなび』(1909年・明治42)
 (右) 『冬の女兒洋服の作り方』(1927年・昭和2)
 (国立国会図書館所蔵)

7. おわりに

『子供之友』の挿絵に描かれた子ども服は、洋装化が進みつつあった大正時代の衣服の傾向を反映していた。西洋前掛(エプロン)は幼児を描く際に多く登場した。裁縫書では当初、和服にも合う形が紹介され、1900年代の装飾が多いデザインから、次第にシンプルなデザインへと変化していた。エプロンは幼稚園児を中心に普及していった。ゲートルは1920年代に流行した防寒用の小物で、挿絵では屋外で遊ぶ子どもの絵に登場していた。ゲートルは欧米でも着用されており、子どもの愛らしさを強調する小物であった。『子供之友』の挿絵には村山知義のように、シンプルで洗練されたデザインの子ども服も掲載されている。欧米の子ども服は第一次世界大戦後に簡素なものが主流となっていったが、その傾向は日本にもおよび、実用的な子ども服が発達していったのである。

引用文献

- 1) 平出鏗二郎:『東京風俗志中の巻』,富山房,130(1902)
- 2) 村田かめ子:新形西洋前掛 小兒二三才,婦人と子ども,6-4,29(1905)
- 3) 山田東明:『洋式小物雑種裁縫新書』,文錦堂,12-30(1907)
- 4) 泰利舞子:『みしん裁縫ひとりまなび』シンガーミシン裁縫女学院実業部,146-151(1909年)

- 5) 岩村秀太郎:『小児服のいろいろ』洋服裁縫師必携書発行所,162-164(1908)
- 6) 岩村秀太郎:前掲書,洋服裁縫師必携書発行所,164(1908)
- 7) 東京女子専門学校,東京裁縫女学校編:『新裁縫教科書、中等教育』,東京裁縫女学校出版部,127(1925)
- 8) エリザベス・ユウイング著,能澤慧子他訳:『こども服の歴史』,東京堂出版,244(2016)
- 9) 田中千代:『新・田中千代服飾事典』,同文書院,303(1991)
- 10) 田中千代:前掲書,同文書院,303(1991)
- 11) 西村伊作:『装飾の遠慮』,文化生活研究会,148(1922)
- 12) 西村伊作:前掲書,文化生活研究会,154-155(1922)
- 13) 西村伊作:前掲書,文化生活研究会,155(1922)
- 14) 津田敏子:『母の手芸』,婦女界社,94(1923)
- 15) 樋口歌代子:『編物の新形と編み方』,家庭生活改善会,205(1923)
- 16) 高橋千代豊:三四才用のゲートルセット,婦女界,45-1,372(1932)
- 17) 千葉智子:男女児兼用のゲートル二種,婦女界,45-2,351(1932)
- 18) 泰利舞子:前掲書,シンガーミシン裁縫女学院実業部,174(1909年)
- 19) 主婦之友社編輯局編:『冬の女兒洋服の作り方』,主婦の友社,61(1927)
- 20) エリザベス・ユウイング著,能澤慧子他訳:前掲書,東京堂出版,203(2016)

注

- 1) 高橋知子:「内藤ルネ展」のためのデザイン再現(第1報)ドレス再現製作とその意義,愛知学泉大学・短期大学紀要,43,25-34(2008)
- 2) 使用した文献は以下の通りである。刈谷市美術館松本育子他篇:『描かれた大正モダンキッズ 婦人之友社「子供之友」原画展図録』刈谷市美術館・板橋区立美術館(2016)、『子供之友原画展 イルフ童画館開館1周年特別展』イルフ童画館(1999)、『子供之友原画集1 竹久夢二』『子供之友原画集2 村山知義』『子供之友原画集3 武井武雄』すべて婦人之友社(1986)
- 3) 後藤和雄他編:『読者所蔵「古い写真」館』朝日新聞社192(1986)、『安城学園百年誌』学校法人安城学園135(平成26)